

15. 井路と井路舟

摂津市域の湿田地帯では用水路のイジ（井路）が通じており、底の浅い井路船で肥料や刈り取った稲を運ぶという水郷風景がかつては見られた。

井路船

A は井路舟で全長約 8m。底は平らで舟縁は頑丈に作られている。

ドタで刈り取った稲をぎっしり詰めて、夫が 1 間半のカイボウ（櫂棒）でトモ（艀）を押し、妻は舳先に綱を付けて引っ張った。人は舟には乗らなかった（一津屋）。

鳥飼上は道を使ったが、鳥飼中は井路舟で運んだ（鳥飼中）。牛は畦道を歩かせ舟には乗せない（鳥飼中、別府）。舟は各家にあった。舟の中で弁当を食べた（鳥飼下）。

井路舟に稲を積む

稲は刈り取って藁で括って稲束に掛ける。この 1 括りを 1 把（わ）と言った。

干したら稲束から 5 把ずつ下ろして 3 回分 15 把で 1 束（そく）に括り、井路舟に積んだ。まず舳の方から 2 束並べて穂を下にしてばらけないように積む。

後ろから詰めて舟幅の広くなるにしたがって 3 列、4 列と増やし、最後は 2 列で舳先は少し開けておく。舳先を軽くしておくともンビイタを越えやすいからである。こうして 1 反 = 300 坪分の稲が 2 回で運べたという。10m × 50m 区画の稲が 1 度で運べたことになる（一津屋）。干した稲は舟で野小屋まで運び、その前でこなした（脱穀した）（別府）。

井路は農道、舟は軽トラ

B C は一津屋の井路。ドタ地帯では井路は農道、舟は軽トラの役を果たした。

稲束はリアカーで運べるのは 2 ~ 3 間分、舟なら 15 ~ 20 間分運べた。春は舟で把を運んだ。夏は畦道を刈って積んで帰った。「この辺りは低いところばかりで、舟なかったら百姓出来なんだ」。年 2 回イジサラエ（井路浚え）をしてドロアゲバに泥を揚げた（別府）。

井路は江戸時代の言葉

奈良時代の頃は水を取るところを何でも「い」（ゐ、井）と言った。泉も井戸も井なら取水用のダムも井とか井堰（いぜき、井関）。ダムから延々と延びる用水路も井であり、中世の人々は新しく開いた用水路は「今井」と名付けた。井路は江戸時代の新語か。

井路舟は舟大工から

鳥飼下は役場・学校・神社とすべて揃ったところで、舟を作る人もいた（鳥飼下）。

舟は鳥飼の五九の坂の際のお寺の隣の舟屋で、昭和 32 ~ 33 年頃買った（別府）。

井路舟は茨田諸堤から昭和 30 年頃、7 万円で買った（一津屋）。

A



B



C

